

情報通信審議会 情報通信技術分科会 産学官連携強化委員会
重点課題WG（第6回）議事概要

1 日 時 平成22年2月15日（月） 11時00分～12時00分

2 場 所 総務省5階 第4特別会議室

3 出席者（敬称略）

構成員

森川博之（主任）、伊藤崇之、宇野嘉修、冲中秀夫（代理：田中寛）、勝部泰弘、加納敏行、木下進、谷口浩一、富永昌彦、西村信治（代理：池田博樹）、端山聡、森田温（代理：丹野興一）

事務局

藤田和重（技術政策課企画官）、太口努（同課イノベーション推進官）、杵浦維勝（同課課長補佐）、藤井信英（同課課長補佐）、他

4 議事要旨

（1）研究開発課題の整理について

（2）研究開発ロードマップについて

事務局より、重-6-1、重-6-2、重-6-3、重-6-4、重-6-5、参考2及び参考3に沿って説明があった。

（3）ディスカッション

（1）～（2）の説明を踏まえ、ここよりディスカッションとなった。主な議論は以下のとおり。

木下構成員：重-6-2のプロジェクト例の文言について異論はない。但し、「グリーン光ハイウェイプロジェクト」の図は、マルチコア・マルチモードファイバが目立ちすぎている。プロジェクト全体を表す図にしたほうがいい。

端山構成員：重-6-2の「研究開発環境・人財のグローバル化プロジェクト」が他のプロジェクトと比べると異質である。研究開発課題の重点化の方向から外れるので、別に切り出してはどうか。また、今後何が出てくるか分からないような革新技術の扱いについては考える必要があると思う。

富永構成員：重-6-2の「グリーン光ハイウェイプロジェクト」が情報量の爆発的増大に対応するという観点であれば、有線だけでなく無線もあると思う。そうするとタイトルは工夫が必要なのだが。

宇野構成員：重-6-2の「研究開発環境・人財のグローバル化プロジェクト」は研究開発環境だけではなく、重-6-1にあるような重点技術実証課題（特に日本が進んでるようなテーマ）を含めてはどうか。

加納構成員：「暮らしを助けるブレインパワー融合ネットワークロボットプロジェクト」に、ロボットの利便性・安全性に加えて低電力というキーワードを入れてはどうか。

谷口構成員：重-6-3のロードマップの「アウトプット目標」や「制度面等で克服すべき課題」に年ごとの目標を入れてはどうか。また「研究開発アウトプット目標」が技術ごとに書かれているが、内容によってはそれぞれの技術に依存関係があることもある。イメージとしてはPERT図のようなものが分かりやすいのではないか。

森川主任：プロジェクトの粒度をどうすべきかは非常に悩ましい。プロジェクト自体はアンブレラプロジェクトのようになるべく大きくしておいた方がよいのだろうか。

事務局：プロジェクトを大きくした方が良いこともあるが、ある程度絞っておかないと狙いがぼやけ、インパクトに欠ける。その兼ね合いは分野によって異なると思うが。

勝部構成員：プロジェクトは参考3（P10）のSWGに対応しているように思うが、プロジェクトを技術の名称で定義してしまうと、後に新しい課題を追加したい時に困る。また、既存の国プロは3年なら3年と期間が決まっていたが、5年、10年

- 経って状況が変わった時に、プロジェクトの運用上の柔軟性をどのように決めるのか。
- 事務局 : 今回のプロジェクトは既存の国プロよりはもう少し広いイメージ。技術開発のフェーズが違うものや分野が違うものを組み合わせるというところも出てくる。また、参考3についてはまだ推進戦略WGにて議論の最中である。
- 宇野構成員 : 重-6-1の「重点研究開発課題」と「社会ニーズ」をマッチさせたものが見える形が、今回のプロジェクトのイメージであると理解している。
- 森川主任 : DARPAのように大きいプロジェクトの中に基礎から応用まで色々なチームが走る形がよいのかなと思う。
- 加納構成員 : 重-6-1には「ヒューマン共生ICT」「未来共生ICT」などいいキーワードがあるが、重-6-2のプロジェクトになると重-6-1から抜き出したように見えてしまう。今後数年間にわたって様々なイノベーションを誘発させることを考えると、プロジェクトはもう少し大きい枠組みで作っておいた方がよい。
- 田中構成員代理 : 重-6-2のプロジェクト例を重-6-1にマッピングさせると、個別の技術へのマッピングとなる。「地球共生ICT」のようにもっと大きな枠でやるなど、どの軸でプロジェクトを考えたらよいのか議論した方がよい。
- 事務局 : 社会ニーズと重点研究開発課題を繋ぐものがまだ弱いという問題意識がある。社会ニーズと研究開発課題は単純に1対1とはならないので、その中間層としてプロジェクトがあると思う。
- 勝部構成員 : 重-6-3のロードマップ作成を社会ニーズというくくりでやると、絞り込みをやっているというより、全ての課題をカバーしてしまうことになる。多少課題が漏れてもいいから絞り込むのか、あるいは社会ニーズベースで網羅的にカバーするのかで考え方は変わると思う。
- 田中構成員代理 : このWGの初めの議論にあったが、社会ニーズから漏れるような技術も忘れてはいけない。技術オリエンテッドなものをすくうようなプロジェクトも必要ではないか。
- 端山構成員 : 重-6-1に挙げられた技術は、社会ニーズに応えられる技術ということで我々が知恵を絞り選んだものである。これを落とすとすると、社会ニーズが一部実現できないということになる。本会合のテーマは産学官連携であり、ロードマップとしては国が関与せず民間がやるものも含め網羅的に書き、産学官連携でやるべきところを明示するのが分かりやすいのではないか。
- 伊藤構成員 : 一番重要視すべきなのは重-6-1の社会ニーズとそれに対応する技術分野であり、これらの技術分野が重要だというのは本WGの共通認識である。プロジェクトはあくまで実施していく時の例であって、それ以外にもニーズに応える技術開発は出てくると思う。ただ一度こういう文章になってしまうと、このプロジェクトだけが取り上げられてしまうということもあるが。
- 富永構成員 : 今あるプロジェクトの粒度ということであれば、他にテラヘルツ波技術もあると思う。ただ先程から議論があるように、粒度をどうするかは難しい問題。重-6-1の社会ニーズにあるような粒で捉えてしまうと、プロジェクトの狙いがぼけてしまう。階層的に整理するのもありかもしれない。
- 勝部構成員 : 社会ニーズでプロジェクトを作ってしまうと、技術開発のロードマップで重複が起これば社会ニーズと技術の対応関係が見えにくくなる。理想的にはプロジェクトは何らかの技術の固まりであって、それと社会ニーズとの対応関係が見えればよいのではないか。
- 谷口構成員 : 重-6-1の「安心・安全で健康な暮らしを支えるヒューマン共生ICT」にまとめられている「情報セキュリティ技術」がプロジェクト例にはないので加えたい。
- 森川主任 : 「社会のインフラを支える基盤となるICT」のようなプロジェクトが欲しい。
- 事務局 : 社会ニーズと重点研究開発課題の対応はやはりマトリックス的になってしまい、それを見ても複雑でよく分からない。少し区分けをして理解可能な範囲にすることが必要である。また、ロードマップは1つの社会ニーズごとに作るイメージを持たれてしまったかもしれないが、そうではない。社会ニーズと研究開発課題の関係が1枚ぐらいのロードマップでまとまるようなものが、プロジェクトの粒度

の1つの目安かと思う。

田中構成員代理：政府目標であるCO₂排出量25%削減のうち、10%をICTの活用で削減することをある程度明示的にするような書き方もよいのではないか。

(4) その他

今回の資料については、本WG構成員からの意見及び2月19日開催予定の親委員会での意見等を反映し、3月開催予定の次回会合へ提出することとなった。

以上